

コメント

シンポジウムの総括 1



アクセル・イベルト

ありがとうございます。最初に、コウ・チェアマンの丹保先生と、「我々はアラームのリンの押しっこをしない」と約束しましたけれども、それだけ短かく終るということでした。

生態系、環境ということを考えるにあたって、特に工業諸国、そして福祉国家というものが、現在どのような形で資源を使い、そして廃棄物を出しているか。もし我々が手をこまねいていけば、環境の劣

化がおこり、そして生態系の危機になるわけです。世界人口は、一九五〇年においては二五億だったが、八七年には五〇億人になり、二〇〇〇年には六〇億人位になるだろうと言われております。更に、二二世紀に入りまして、多くなれば一〇〇億ということも考えられるということがあります。

その中で競争状況が強化し、そして天然資源の争奪戦になる恐れもあるわけです。世界中の人々が色々な社会を営んでいる中で、皆が納得していることは、このような環境と我々との係わり方、これをどのように持って行くかは、一九九〇年代に結着がつくこと。これに負ければ、我々の二一世紀の環境問題というのは、もう手はどしどしが無くなること。これは衆目の一致するところでありましょう。

このためにもう一つ言うべきことは、一国のレベルにおいておきた破壊というものが、決して一国で終わらないこと。公害、汚染というのは、実に世界的な現象であります。これは今日のご発言者の皆さんが強調なさったことです。一国だけの孤立した解決策というのは、環境の問題に関してはありません。

個々の国がそれぞれの戦略に基づいて、環境の問題を自からの知識と技術と条件に合わせてやっていかなければならないと同時に、一方ではやはり国際的な相互関係の中で、全世界的に共通する政策を採用していく必要があるのです。共同の国際行動というものを、国境を越えて行なっていかなければならない。共通の戦略、又は環境に対処すべき様々な技術を、共同で開発し運営していくことによって、初めてこの世界的な問題の解決にあたる事ができるのであります。今日は、そういったことを改めて確認するお話を聞かせていただきました。

また技術移転あるいは資源の移転を、途上国に対

して行なっていかなければなりません。特にこれは、環境に関する計画の面でも必要なことであります。とりわけ、現在東欧に対してこのような努力や援助をしていくことが必要でありましょう。既にもう劣化している環境をどれだけ浄化できるかということは、大変重要な問題です。製品の寿命ということも考えても、いかにして環境的に劣化しないような製品を作っていくかということが、これから問われることであります。ゆりかごから墓場まで、すべてがそのような意味で製品のあり方が問い直される、そのような時代に入っているのであります。

我々には、共同責任というものがございます。もし人間の創意工夫をもってしても、持続し得る発展と、そして将来の世代のための地球を残し得るような世界を作れないとしたならば、これは我々の責任が果されていないということになります。健全なる環境政策というものを立てこれを運営することは、それぞれの国全体の共同責任であります。実際、企業業界が行なっていることは非常に重要な意味を持っていますが、持続可能な発展を行なうためには、製品を作るプロセス、そして製品のあり方、サービスのあり方を改めて問い直し、より良いあり方を全世界に広げていく必要があります。もちろん、産業ビジネスのチャンスというものが一方にあり、また、「緑の党」などに言われているクリーンな消費のあり方やリサイクルが強調されなければなりません。これがそれぞれの責任、それぞれのコミットメントを表わす具体的な表現であります。実現可能なやり方をとり、ハイレベルで、そのコミットメントを行なうこと、それが経済活動と同時に波及されなければなりません。ひとことでまとめると、国際的な合意に基づく以外、大々的な環境の改善は行な

えません。新しい制度を作って対応することが、環境保全にとって不可欠であります。現在、国際貿易交渉などで行なわれている既存のシステムがございませけれども、それと同様或はそれ以上の制度的な基礎のもとに、世界的な環境の問題の解決にあたっていく必要があるかと思えます。

日本とスウェーデンは共通性が大変に多い、特に環境をめぐってそう言えます。どちらの国も、環境の保護という意味では活発な動きをしております。従って、特に共同の努力を行なう分野としては、廃棄物の処理の仕方、或は、よりクリーンな環境を作り出した日本の技術を通して、いくつかのプロジェクトを実施し、或は、日本の現状視察のための視察団を送ることなどがあげられます。また大来先生もおっしゃいましたが、昨年イエーテボリで開かれた大きな国際会議に、多くの日本の専門家が来られたように、両国の専門家の交流をはかることも必要です。

国王陛下には心からお礼を申し上げたいと思えます。我々のこの努力を通じて、更なる発展がもたらされることを願っております。陛下のお言葉にもございしましたが、この様な努力は、将来の環境問題解決への有意義な第一歩であるということです。その第一歩としてのこのシンポジウムを準備し、実行にあたられた北海道の道庁はじめ様々な団体の方々、それからまた、スウェーデン側の実行にあたられた方々の努力に感謝したいと思います。こういったことを通して、我々は目標達成へと向って行くのだと思えます。

ご静聴ありがとうございました。